

「来たるべき世に備える」

～聖書こそが私たちの力となる～

「これから書くことを、よく心にとめておけ。この世の終わりには、クリスチャン〔イエスを信じる者〕でいることが非常にむずかしくなる。」2テモテ3:1〔アライブ訳〕

「この世の終わり」とは今の時代を指しています。そして、これからはますますそんな時代になっていくことを示しています。真面目に生きようとすればするほど、そんな生き方をしていくことが困難になってきます。

この近所の千曲公園で痛ましい事件が起きました。真相はまだ分かりませんが、御家族、関係者の方々の痛みを考えると非常に辛い気持ちになります。これからの若者たちや、子どもたちのことを考えると、これからの時代を生きていくということをどのように伝えていけるのか？それは信仰に立って伝えていかなければ不可能なことであると思います。教育関係者の方々のために祈る必要を感じました。もっともそのような現場に聖霊に満たされた生きた信仰者たちが入り込んでいく必要があります。

そして、そんな信仰者たちを励まし、導いて下さるのが、神の言葉、「聖書」です。そこには、神の息がかかっている特別な生きた神様のみことばが書かれています。どのように人生を歩むべきか、どのように現実問題に対処していくべきなのか？しかし、それは、How toではなく、その根本的な答えが示されています。聖書はその他の書物と同様に、表面的に読むことはしないで、その内容から、神様ご自身が私たち一人一人に何を語ろうとされているのかということ、聖霊様に祈りつつ、読んでいく、味わっていくことが必要です。

イエス様は40日の荒野の試練の後に悪魔の誘惑に会われました。まさに、信仰が震われるような経験をイエス様も通過されました。その第一の闘いの答えは、「人はパンのみで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つの言葉によって生きるのである」とお答えになりました。私たちはこの世の目に見えるものによって生きて行くのではなく、聖書のことばによって生きていくのだ。ということなのですが、その聖書のことばは、一つ一つが神様ご自身の御口から出るものなのだということを悟る必要があります。聖書は神様との生きた関係の中で読むことなしに、その意味をなさないということだとも言えるわけです。

飽食の時代、十分に食べる物がある時代であるにも関わらず、人々は益々不幸な人生を歩んでいます。そこには、神の生きた御言葉が語られないからです。

主なる神は言われる、「見よ、わたしがききんをこの国に送る日が来る、それはパンのききんではない、水にかわくのもでもない、主の言葉を聞くことのききんである。彼らは海から海へさまよい歩き、主の言葉を求めて、こなたかなたへはせまわる、しかしこれを得ないであろう。その日には美しいおとめも、若い男もかわきのために気を失う。」（アモス8:11-13）